

院長 コラム

一緒に考えよう
健康のこと
医療のこと

④7

終末期医療について



市民病院
院長 神谷里明

団塊の世代が75歳を迎え、多死社会に突入する2025年問題をご存じでしょうか？75歳まではなかなか病気にもならないし、病気になっても回復もします。しかし、75歳を過ぎると病気は治すものではなく付き合っていくものとなります。その先には必ず死というものが待っています。人間には寿命が有り、必ず最後の時を迎えなければなりません。誰にでも訪れるものであり、特別なものではありません。しかしどのような過程をたどり、どこで、どのように死を迎えるのか、それを考えていかなければならない時です。

突然最後の時が訪れる場合もあります。突然来るものには対処のしようはありません。しかし、ある程度時間が与えられる時もあります。残された時間が有限だとわかった時にどのように対

応するか？自分はどのように生き、最後を迎えたいのか考えておく必要があります。残された時間が有限であるとうわかった時に、私たち医療者は今後どのような経過をたどるのか、いつまで自分で判断できるのか、わかる範囲で本人やご家族の方に話をします。決して聞いて楽しい話ではありませんが、必要な話です。ただし、前もってご本人がそのような話は聞きたくないと表明していれば、話はしません。あくまで本人が希望すればです。

残された時間をどこで、誰と、どのように過ごしたいのか。自分で考え、家族と話し合っておくことが必要です。自分一人でそう思っている、周りが知らなければ、自分の思っていることは別の選択がなされてしまうかもしれません。日ごろから家族、友人に対して自分は最後まで生きたいのか伝えておくことが必要です。

今では約80%の方が病院で亡くなっています。かつては(と言っても40年以上前になりますが)家で亡くなるのは特別なことではありませんでした。ただ家族構成が大きく変わっている現在、家で亡くなることはそれほど簡単なことではありません。最後をどのように過ごしたいのかよく考え、家族と相談し、表明しておくことが必要です。